第六章　サウディアラビアの王権
― 祭祀王ファハド ―

保坂　修司

１．はじめに

サウディアラビアがサウディアラビアとして成立したのは1932年であり、その意味ではきわめて新しい国家といえる。現在のサウディアラビアの王制は、とくに1970年代以降の急激な石油収入の流入を前提に構築されたものである。またそれにつづく政治、経済情勢の大きな変化は前任者ワッハーブ王国からの伝統的な統治形態を本質的に変化させたといっていいだろう。

しかし、だからといってサウード家の統治が旧来の伝統的な要素を無視しているわけではない。いや、むしろこれら伝統的な要素を現代的な統治形態のなかに巧妙に組み込んでいるといっていいかもしれない。

ここでは、ファハド王制とくに湾岸戦争後の王制の特徴をとりあげていく。王制がこの時期、成熟期に入ってきたとみなすことができるからである。1930年代に領域が、1970年代に政治･経済基盤がほぼ完成し、マッカ占拠事件や湾岸戦争などの激動を経て、サウード家による統治は機構的には安定しつつあるといえるだろう。もちろんこれは政治的な安定を指すものではない。聖地を支配下におさめ、石油収入を獲得し、２聖モスクの守護者という称号を用い、これ以上機能的に大きな変化があるとは考えづらく、その意味では単なる組織的な安定にすぎない。むろん立憲君主制などのいわゆる民主化の方向に進むとすれば、話は別である。しかし、ここではその問題に立ち入ることはない。あくまでサウード家の絶対的な統治を前提とした王権のさまざま特徴を分析していくつもりである。

２．雨乞いをする王

中東に長くかかわっていると、ときおり雨乞いを目や耳にしたりすることがある。雨乞いそれ自体はとくに珍しい話ではない。日本やヨーロッパでも行われている。中東あるいはイスラームを専門としない人が驚くのは、中東あるいはイスラーム世界における雨乞いがしばしば国家によって行われることではないだろうか。もちろんこの地域に私的に行われる雨乞いがないわけではない。こちらも国家による雨乞いと同じように、むしろそれ以上に盛んに行われている。だが、問題は国家による雨乞いのほうである。21

世紀に突入した現代社会において雨乞いというきわめて「非科学的」な行為が国家の主導で行われている。いや、こうした言いかたは正しくないだろう。正確にいえば、国家主導の雨乞いはイスラームの公式の宗教行事であり、イスラームを国教とする国の政府が公式のかたちで雨乞いを行うことは何ら不自然ではないのである。この場合正式には「雨乞い礼拝」と呼ばれる（アラビア語では（　　）。単なる雨乞い（　　あるいは　　）とは異なるのである。

たとえば、サウディアラビアでは1992年から2000年まで筆者が確認しただけで、14回の雨乞い礼拝が実施されている。一般にサウディアラビアでは10月以降雨季に入る。雨季といっても首都のリヤードなど砂漠がちの地域ではその雨量も高が知れている。しかし、たとえそうであっても遊牧民にとっては重要である。その雨が遅れるようなことになれば、死活問題であろう（なお2001年になってからでは２月８日に雨乞いが行われている）。

サウディアラビアにおける雨乞いは基本的にはこの季節の変化と連動している。好きなときに、勝手に雨乞いを行うわけではないのである。原則として雨季に入ったのに、降雨が遅れている場合に、雨乞いが行われる。したがって、11月から12月が雨乞いの最盛期となる。

一般にサウディアラビアで雨乞いが行われるときは、次のような手順を踏む。2001年２月の例をおってみよう。

1992/11/16
1994/01/30
1994/11/21
1996/11/04
1996/12/05
1997/02/27
1998/11/10
1998/12/21
1999/11/30
1999/12/20
2000/01/17
2000/02/21
2000/03/27
2000/10/30

サウディアラビアにおける雨乞い礼拝

まず２月６日に王宮府（　　）が声明を発表する。通常、サウディアラビアの国王が発する命令には２種類ある。ひとつはアムル・マラキー（　　）、文字どおり「王の命令」である。もうひとつはマルスーム・マラキー（　　）といわれる。便宜上、前者を「王命」、後者を「勅令」と呼んでおこう。結果的にいえば、ふたつとも王が発する命令であり、同じ力を有しているが、理論的には別ものである。後者の勅令のほうは、閣僚評議会（内閣）の決議を国王が承認し、発布するものである。それに対し前者は、閣僚評議会とは無関係に国王がみずからのイニシアティブで発する命令を指す。

しかし、雨乞いについてはこのどちらでもない。ただの声明（　　）である。したがって拘束力は強くない。王宮府の声明は、どの雨乞いでもほとんど同じであり、だいたい

以下のようなかたちになる。

降雨の遅れと国家の必要にかんがみ、降雨の遅延、旱魃のときに雨乞い礼拝を行った、われらが預言者ムハンマドのスンナにもとづき、２聖モスクの守護者、ファハド・ビン・アブドゥルアジーズ・アール・サウード国王―アッラーがかれを支持し給わんことを―は来るズルカァダ月14日木曜日（2001年２月８日）に―もしアッラーが望むなら―王国全土で雨乞い礼拝を行うよう呼びかけた（　　）。

われらアッラーに、すべてのものの呼びかけに答え、その僕と国家に雨をもたらし、恵みの雨と祝福を降らせ給うことを求める。（神が）祈りをお聞き給わんことを。

命令という言葉はいっさい使われていない。単なる呼びかけである。ちなみに引用した文章は日付をのぞけば、どの雨乞い礼拝の告知でも一言一句同じである。

さて、実際に２月８日になると、サウディアラビアの各地で雨乞いの礼拝が実施される。実際にどのようなかたちで行われているかは新聞等の報道を頼りにするしかないが、基本的には預言者のスンナにもとづいていることは確かである。前述の告知文でも、またその後の礼拝に関する新聞記事でも「預言者のスンナ」ということがしばしば強調されている。

雨乞いについてコーランはくわしい述べていない。雨乞いがより明確に言及されているのはハディースのほうである。たとえば、ブハーリーの『ハディース集』などに出てくる記述をまとめると、預言者のスンナとしての雨乞いは次のようになる。

１）モスクの外あるいは内で礼拝を行う。
２）キブラに向かって２ラカアの礼拝をする。
３）説教。
４）服を反対に着る。
５）手を挙げる。

雨乞いが行われる場所はモスクの内あるいは外どちらでもかまわない。サウディアラビアではかなりの人数が参加するので、屋外で行われるほうが一般的かもしれない。預言者もモスクの内と外、両方で雨乞いを行っている。

２番目の「キブラに向かって２ラカアの礼拝をする」というのは、カァバ神殿に向か

って２セットの礼拝を行うことを指す。まず礼拝導師であるイマームが、コーランの第１章ファーティハを読み、ついで第87章「アァラー（いと高き神）」という章を読む。これが最初のセットであり、第２セットは、もう一度「ファーティハ」を読み、それから第88章「ガーシヤ（蔽塞）」を読む。それからイマームは説教をする。ただし、この説教は礼拝の前に行われることもある。これが終わると、人びとは着ている服をさかさまにする。これには、左右をさかさまにする、裏返しにするという２とおりの説がある。それからマッカに向かってアッラーに雨を降らせてくださるよう呼びかけるわけだ。そのあいだ人びとはずっと手を高く挙げている。

着ている服を逆にするというのは当然、現状を逆、つまり旱魃の状態を180度変えて雨を降らせることを象徴している。手を挙げるという行為が何を意味しているのかはわからないが、旧約聖書にモーゼが天に向かって手を挙げて雨を降らしたという記事があるので、このことと対応しているのかもしれない（ちなみにモーゼが水を出したという記述はコーランにも出ている）。

このような雨乞いは、全イスラーム世界共通のものであり、サウディアラビアでもこれと同じことが行われている。サウディアラビアにおける報道では、一般に各州における雨乞い礼拝の様子がくわしく述べられる。くわしくとはいっても、パターンはまったく同じで、どこそこの町（州都）でサウード家の王子（ふつうは州知事の名前が入る）を筆頭に雨乞い礼拝が行われ、何某が説教を行い、何をいったとなる。実際に礼拝の儀式をとりしきるのはサウード家のメンバーではなく、その土地の有力な宗教者である。たとえば、首都のリヤードであれば、礼拝を実施するのはアブドゥルアジーズ・ビン・アブドゥッラー・アールッシェイフ、すなわちサウディアラビア総ムフティーであり、マッカであれば、ハラーム・モスクのイマーム、ムハンマド・ビン・アブドゥッラー・スベイルとなる。

たしかに雨乞いは、法律上からいえば、政治ではない。だからこそ「王命」「勅令」などを使えず、「声明」という言葉で出されるのである。しかし、同時に雨乞いは政事でもある。サウード家が総動員でこの行事に参加するのはそのためである。

ここで注目すべきは、サウディアラビアでは国王が雨乞いの声明を出していることだ。つまり、サウディアラビア国王の権力のなかには、外交や石油政策に関する重大な決定と並んで、雨乞いの礼拝を行うことも含まれていることになる。同じ国家元首であってもたとえば隣国クウェートでは、雨乞いの声明を出すのは首長ではなくイスラーム問題省である。これはクウェートだけではない。多くのイスラームの国で雨乞い礼拝の声明

を出すのはイスラーム問題省ないしはそれに類する省庁なのである。

ただどちらにせよ、雨乞いが深く国家権力と結びついているのは同じである。1999年に雨乞いの礼拝をめぐってヨルダンで政府とイスラーム主義者のあいだで一触触発の対立があったのは記憶に新しい。対立の根っこは非常に深いものがあるのだが、表面的な原因は、イスラーム主義者たちが独自の雨乞いの礼拝を行おうとしたのに対し、政府側が、雨乞いの礼拝を行えるのは当局だけだとしてそれを禁止したことにあった。

雨乞いは原則として共同体による共同事業である。雨を降らせることが共同体の死活問題であるとするなら、共同体の長は、預言者ムハンマドのように自由に雨を降らせることのできる超自然的な能力の持ち主であるか、さもなくば、礼拝の霊的な力を強化するため多数の信者をなかば強制的に雨乞いに参加させることのできる政治的・宗教的権力をもっているかの、どちらかでなければならない。雨乞いは文字どおりマツリゴトであり、雨乞い礼拝を呼びかけるサウディアラビア国王は政治的な王であると同時に、イマームとしての「祭祀王」でもあるわけだ。地方都市で信者たちの先頭にたって雨乞い礼拝を行う州知事たちは原則としてサウード家のものであり、したがって祭祀王の地方における名代と考えられる。

もちろん国家権力とは別に雨乞いを行うことは可能である。この場合にはしばしば聖者崇拝などがかかわってくる。イスラーム世界の各地には、聖者廟やイスラームの英雄たちの墓に雨を降らせる力があるという信仰が生きており、イスタンブルのエユップ・スルタン・モスクなどがその代表である。またイスラーム以前には、火や動物を用いた雨乞いが行われていたことが知られている。しかし、これらは、公式のイスラームから見れば、異端である。ヨルダンでの事例に見られるように、国家権力以外で公式の雨乞い礼拝を行おうとすれば、しばしば国家権力と対立しなければならない。

実はヨルダンのケースとサウディアラビアのケースを比較すると興味深いことがわかる。ヨルダンでは雨乞いの声明を出すのは国王ではなく、宗教省なのである。預言者の血をひくハーシム家のヨルダンでは雨乞いは国王の権能のなかに含まれていないのだ（ただしフセイン国王時代は不明）。またサウディアラビア以外にも国王を含む国家元首が雨乞いを呼びかける国は中東にはいくつか存在する。たとえばアラブ圏ではサウディ・アラビア、モロッコ、イラク、シリア、UAEで国家元首が雨乞いを呼びかけている。モロッコ国王が雨乞いを呼びかけるのはモロッコ国王が「信徒の統率者　　」と呼ばれる宗教権威だからであり、これは非常にわかりやすい。アラブ圏以外ではたとえば、ターリバーン政権下のアフガニスタンでやはり国家元首相当の人物が雨乞いを呼びかけ

ている。かれもまた「信徒の統率者」である。社会主義バァス党政権のイラクとシリアでどうして大統領が雨乞いを呼びかけられるのかは、UAEのケースを含め、今後の検討課題であろう。

３．洗う王

サウディアラビア国王がもつもうひとつの宗教的要素としてカァバ神殿洗浄の仕事が挙げられる。ただし筆者が調べた1990年以降のケースでは、国王みずからカァバ神殿を洗ったという事例は見つからなかった。けれども、カァバ神殿は年に２度洗浄され、ふつうそのときにはマッカ州知事が「国王代理」として洗浄を行うのである。したがって、カァバ洗浄も雨乞いと並んで、サウディアラビア国王の宗教権威のひとつとみなすことができるであろう。

ちなみにカァバ洗浄もスンナと考えられる。預言者ムハンマドがカァバ神殿に入り、偶像を破壊したのち、洗浄して香を焚きこめたという伝承があるからである。現在でも実際に洗うときは薔薇水とザムザムの水を使うといわれている。また年２回というのは通常シャァバーン月１日とズルヒッジャ月１日の２回である。これには断食と巡礼というイスラームの２大行事の準備という意味もある（日にちが前後することはあるが）。

1999年３月18日付のAP通信は、当時のマッカ州知事、マージド・ビン・アブドゥルアジーズがファハド国王の代理としてカァバ神殿を洗浄したと報じ、この儀式が、かつてはファハド国王によって行われていたが、1995年に病気で倒れてから体調がおもわしくないのでここ数年はカァバ洗浄を行えなくなっていると述べている。しかし、この記事は正しくない。筆者が知るかぎり、病気で倒れる前の1992年以降、ファハド国王は一度もこの洗浄を行っていないからである。逆にいえば、洗浄の儀式はマッカ州知事が、国王の代理として行うものであるとみなすことができる。唯一の例外は1996年12月（シャァバーン月）にアブドゥッラー皇太子がカァバ洗浄の儀式を行ったことである。

ただ、州知事にせよ、皇太子にせよ、どちらの場合でも、かならず「国王代理」という文言が入る。やはり、実際にやるやらないは別にして、この洗浄という儀式は本来は国王の職能のひとつであり、預言者ムハンマドの例を引くなら、象徴的にはイスラームの聖地マッカ、マディーナを管理するものの役目なのであろう。

そのほか、ファハド時代に国王が関わる、おもな宗教関連行事としてはラマダーン明け、および巡礼の際にムスリムたちに対しメッセージを送ることが挙げられる。

４．踊る王

サウディアラビアの王権を考えるうえで、宗教的な権能と並んでもうひとつ重要な要素がある。ここではそれを「剣舞」というキーワードで考えてみたい。もちろん剣舞と雨乞いは直接にはまったく関係ない。しかし、今日のサウディアラビアで両方とも非常に重要な役割を果たしているということでは共通点があるといえる。ここで述べる剣舞はもっぱらアラビア半島における剣舞、具体的にいえば、サウディアラビアおよびペルシア湾のアラブ諸国で今日行われている剣を使った踊りのことである。

この剣舞はサウディアラビアやクウェートではふつうアルダ（　　）と呼ばれている。だいたい男たちが列をつくって、向き合って踊る。そのとき頭のうえに剣をかかげ、それを指を器用に使って頭上でくるくる回転させたりする。これが、よそのものから剣舞、スウォード・ダンスなどと呼ばれる理由である。またUAEでは似たようなものでアイヤーラとかリーワと呼ばれる踊りが知られている。

この剣舞がサウディアラビアにおいてどれぐらい重要かというと、たとえば、インターネットのサウディアラビア国営通信SPAのウェブサイトでニュースのなかから「アルダ」という単語を検索してみると、ずらずらとたくさんヒットするのである。実はこの「アルダ」という単語は、一般的なアラビア語-英語辞書には出てこない。しかし、そんな珍しい単語なのにインターネットで検索するとたくさん引っかかってくるのである。もちろん、ヒットするといっても全部が全部、剣の舞としてのアルダを指しているわけではない。しかしながら、大半が剣舞を指していることは間違いないだろう。

ニュースのなかにどうしてこんなに踊りのことが出てくるのであろうか。たとえば、

SPAのニュースをひとつだけ紹介してみよう。あるニュースには「アブドゥッラー皇太子殿下はサウディのアルダ（　　）に参加した」という文章がある。実は、SPAのサイトからアルダで検索すると、大半がこれとほとんど同じ記事を引っ張ってくるのである。違うのは固有名詞の部分ぐらいで、あとはまったく同じ。つまり「だれだれ王子がどこそこでアルダに参加した」という記事ばかりなのだ。SPAのニュースは王族であるサウード家の動向を中心にしているから、王子の名前が頻出するのは当然だが、問題は、この王子たちがのきなみ剣舞を踊っていることである。基本的には、王子たちがサウディアラビア国内のどこかにいくと、かれを歓迎する宴席が設けられる。その宴席で場が盛り上がってくると、いつのまにやら多くの人たちが剣の舞を踊りはじめ、王子もそれに参加するという図式である。日本でもよく沖縄の人たちなどが、宴会で自然と沖縄民謡の独特の舞をはじめるというのがあるが、まさにそれと同じようなものと考えていいだろう（もちろん、剣舞が宴席であらかじめ設定されていることもあるだろう）。

今日では、いろいろなおめでたい席で剣の舞が踊られている。王子を迎えた宴会もそうだし、結婚式などでもこの踊りが披露される。クウェートでは昔、断食明けとか犠牲祭といったイスラームの重要な儀式にアルダが踊られることがあったそうだ。広場に旗が立てられ、男たちが集まってきてその周りで踊るというのが一般的だったらしい。最近はプロの楽団と踊り手がいて、踊りそのものもかなり洗練されてきているが、王族を含めて一般の人びとの踊りはもっと素朴なものだ。もともとは戦いの踊りだから、戦士たちが戦場で、あるいは戦地に赴くまえに踊る踊りだったといわれている。前述のように、男たちが列になって向き合って踊るというのが基本であるが、これは明らかに戦闘場面を象徴している。また剣の上げ下げや、前後へのステップはそれぞれ勝利と敗北を意味しているといわれている。

クウェートではさきほど述べたように、真中に旗をたてて、その周りを回りながら踊ることもあった。銃が導入されたのちは、剣とともに銃をかかげて踊ることもある。楽器は通常は打楽器だけが使用されるが、銃がある場合にはしばしば銃をうちならすこともある。詩人が参加していれば、その詩人が長詩（カシーダ）を歌う。

アルダにはいろいろ種類があって、たとえばクウェートではバフリー、ナジュディー、ハサーウィー、ハーイリー、ダウシリーなどの踊りが知られている。このうちナジュディーというのはおそらく「サウディのアルダ」に近いものなのであろう。クウェートやサウディアラビアでは男性だけが踊るのが一般的だが、現代のUAEでは女性も参加して

踊ることがある。

アルダそのものはアラビア半島固有の、そしておそらく遊牧民を起源とする踊りだといわれている。しかし、UAEのリーワという踊りは東アフリカに起源をもつとされる。ペルシア湾は、古くから東アフリカと奴隷貿易や建材としてのマングローブの輸入などで直接取り引きがあったから、そのなかでリーワも東アフリカから伝えられたのだと考えられている。だが、内陸部のアルダとの関係はよくわかっていない。ただ、アルダにしろリーワ、アイヤーラにしろアラビア半島においては日常生活のレベルまで浸透した文化であることは間違いない。たとえばバハレーンでは、国営電話会社の発行するテレフォンカードの図柄にアルダが選ばれており、アルダがバハレーンを代表する文化のひとつであるとみなされていることがわかる。

ただし、重要な問題がある。もちろんイスラームの問題だ。たとえば、13世紀の法学者イブン・タイミーヤは、「踊りと音楽は、モンゴルへの服従と同じように、信者にとって危険である」と述べている。またイブヌルジャウジーも「踊りは、悪魔に唆された不道徳な行為である」と主張した。実はこの２人ともイスラームの４大法学派のひとつであるハンバリー派のもっとも重要な学者であり、サウディアラビアのワッハーブ派（公式にはハンバリー派）にも強い影響を与えているのである。つまり、祝い事があるたびにアルダを踊っているサウディアラビアの王族たちは、自分たちの信じる法学派の最高権威に逆らっていることになる。筆者がサウディアラビアに住んでいたとき、サウディアラビアのあるところで楽器屋が廃業して店にあった楽器をすべて燃やしてしまったというニュースを読んだことがある。驚いたのは、これを報じた新聞がこのニュースを美談として報じていたことである。つまり音楽は人間に神を忘れさせる所業であり、その道具である楽器を燃やすというのは宗教的に正しい行為であるという論調が読み取れるわけだ。

ことほどさようにワッハーブ派の文脈では音楽や踊りの肩身が狭い。だが、それにもかかわらず、ワッハーブ派の長、すなわちイマームでもあるサウディアラビアの王は、本来なら音楽や踊りを取り締まる立場にいるはずなのに、みずからはさまざまな機会をとらえて踊りまくっているのである。

ファハド国王の前任者で1982年に亡くなったハーリド前国王は、政務を当時のファハド皇太子に任せっきりにしていたことで知られている。ハーリド国王が宮殿で見つからないときには、砂漠で鷹狩をしているか、遊牧民のところにいってアルダを踊っているかのどちらかだ、と当時からまことしやかにいわれていたぐらいである。

王族であるサウード家のメンバーから見れば、踊りを踊って反イスラーム的であると非難される可能性よりも、踊らないことによる危険性のほうをより強く感じているのかもしれない。つまりアルダを踊らないということは、遊牧民、より正確にいえばアラビア半島のアラブの部族民としてのアイデンティティを蔑ろにすることであり、剣に象徴される戦士としての素養にも欠けるとみなされる恐れがあったということだ。アルダという踊りは、サウディ人、サウード家の人たちのDNAレベルにまで深く刻まれているといっていいかもしれない。アブドゥッラー皇太子は、部族との紐帯をきわめて重視する人だといわれている。かれがアルダを踊っているときに見せる、本当にうれしそうな顔がそれを示しているといったら言い過ぎだろうか。さきほど、サウディアラビアの王は政務をつかさどる国王であると同時に、信仰を導く祭祀王でもあったと指摘した。ここでは、サウディアラビア国王はアラビア半島の部族を束ねる、族長でもあるということをつけくわえておこう。

５．移動する王

現代サウディアラビアの国王を考える場合、もっとも重要な役割は統治者としての役割である。サウディアラビアの王はけっして象徴的な王ではない。かれは君臨するだけでなく、実際に統治する王でもあるのだ。サウディアラビアの王が政治的権力を行使するとき、それは閣僚会議（内閣）を通じて行われるのが一般的である。ファハド国王は、閣僚会議議長（首相）として政治権力を振るう。それは勅令というかたちで結晶する。そしてその権力が日常的に行使される場が定例閣議である。

われわれの常識からいえば、定例閣議が行われる場所は首都である。日本でいえば、東京だし、アメリカでいえば、ワシントンだ。ところがサウディアラビアの場合、かならずしもそう簡単にいいきれない。たとえば1992年から1998年のあいだ、年の最初の定例閣議はリヤードで行われていたが、1999年はマッカで開催され、翌2000年はジェッダで、そして2001年にはまたリヤードに戻っている。たしかにこれだけで考えれば、リヤードで定例閣議が行われるケースが多いように見える。しかし、たとえば、2000年だけをとってみると、全部で44回の定例閣議が行われ、リヤードで開催されたのはそのうち18回である。１回はマッカで行われ、残りはすべてジェッダであった。つまり定例閣議は首都であるリヤードよりジェッダで行われることのほうが多いのだ。ちなみに定例閣議は若干の例外はあるもののほぼ毎週月曜日に実施される。

定例閣議の開催は毎週月曜日に行われる以外、表面的には何ら法則性がないように見える。しかし、これもちょっと視点をずらしただけで、興味深い事実が現れてくる。という

よりむしろ、この「ずらした視点」のほうがサウディアラビアの文脈においてはより正当性をもっているといえよう。

第一に定例閣議が開催される都市である。筆者が調査した1990年以降に限定していうと、閣議が行われるのはリヤード、ジェッダ、マッカ、マディーナだけである。ただし、1992年以前については資料の関係でかならずしも正確ではない。調査できなかった定例閣議が多数あり、上述の４都市以外で閣議が開催された事例は否定できない。しかし、すくなくとも1992年以降については上記４都市以外で閣議が開催されたことはないはずである。ちなみに1990年以前では1982年６月にターイフで臨時閣議が行われている（これはハーリド国王が死ぬ直前に行われている）。またマディーナで閣議が行われたのは1992年と1994年の２回だけである。

定例閣議の場所については法律上明確な基準があるわけではない。閣僚評議会法によれば、閣僚評議会の本部はリヤードにおかれるということになっている。だが、同評議会の会合をリヤード以外で開催してもよいとしている（1992年閣僚評議会法第２条）。この条項は定例閣議がリヤード以外で行われる根拠と考えられるが、ジェッダやマッカという固有名詞は出てこない。また1950年代の古い閣僚評議会法では、定例閣議は「少なくとも月１回」と規定され、議長が必要とみなせば、臨時閣議を開催できるとなっている。したがって、現在のように毎週月曜日に定例閣議をリヤード、ジェッダ、マッカ、マディーナで開催するという形態は大もととなる閣僚評議会法で定められているのではなく、細則あるいはもっと別のもので規定されていると考えられる。しかし、残念ながらそれらが何であるかはつきとめられなかった。

ただ、閣議が実施される都市はリヤードをのぞくと、いずれもヒジャーズ地方であることは示唆的であろう。なぜならサウディアラビアの閣僚評議会はもともとヒジャーズに起源をもっていたからである。サウディアラビアの本来の政府はナジュドにあったが、アブドゥルアジーズ初代国王時代のヒジャーズ征服によりしばらくのあいだナジュドとヒジャーズという二重政府の状態がつづいていた。1950年代にいわゆる内閣が組織されたが、これはヒジャーズにあった閣僚評議会（　　、ちなみに現在の50年代以降の閣僚評議会は　　）を発展させたものと考えられている。サウードからファイサル、ハーリドの時代にも、現在と同じように定例閣議の場所があちこち移動していたかどうかはわからない。しかし、閣議がナジュドとヒジャーズのあいだを移動することを閣僚評議会の起源にまでさかのぼらせることはあながち的外れではないだろう。

もうひとつ注目しなければならないのは定例閣議移動の際の規則性である。前述のように表面的にみていては、移動の規則性は浮かんでこない。だが、すこし視点をずらしてみると、定例閣議がかなり規則的に移動していることはすぐにわかる。もちろん、ここでいう「視点をずらす」というのは西暦からヒジュラ暦へ視点をずらすことを指す。考えてみると、サウディアラビアの公式の暦はヒジュラ暦であり、しごくあたりまえの話だが、定例閣議も西暦ではなく、ヒジュラ暦によって動いている。ただし、若干例外があるため、単純に日付をおっていくとかえって規則性がわかりづらくなるかもしれない。そこで1990年以降に開催された定例閣議のうち筆者が確認できた372件について大まかに数量化して分析してみよう（なおそのうち１回だけは臨時閣議である）。

調査した期間は1990年２月５日から2001年２月26日までの11年間である。しかし、前述のように、1992年以前についてはデータにかなりの抜けがあり、かならずしも正確とはいえない。

まずこの372回の定例閣議を主宰者であるが、262回とファハド国王が圧倒的に多い。これにアブドゥッラー皇太子、スルターン国防相がそれぞれ78回、30回でつづく。それ以外で閣議を主宰したものは存在しない。閣議は法律上、閣僚評議会議長（首相、現在なファハド国王）が主宰するのだが、議長不在などの場合には第１副首相、第２副首相が閣議を主宰することがある。アブドゥッラー皇太子は第１副首相、スルターン国防相は第２副首相であり、２人ともその資格で閣議を主宰している。

閣議主宰者

名　前	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	計
ファハド	9	7	17	23	13	15	30	38	36	28	39	7	262
アブドゥッラー	0	1	4	6	13	18	11	1	8	12	4	0	78
スルターン	0	1	3	3	9	10	0	1	0	2	1	0	30
不明	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
計	9	11	24	32	35	43	41	40	44	42	44	7	372

1995年にファハド国王とアブドゥッラー皇太子の数が逆転しているのはファハド国王がこの年に病気に倒れ、国王の権力を皇太子に一時委任したためだ。ただし、アブドゥッラーが議長をつとめる数が多いのはその１年前の1994年にも見られる現象である。ファハド国王の体調については諸説あり、実際のところはわからないが、すくなくとも閣議を見るかぎり、2000年以降は病気以前の状態に戻ったと推測できる。

さきほど西暦で見ると、閣議の正確がわかりにくくなると述べたが、実際に例を出し

て検証してみよう。下記の表は西暦1994年と2000年における定例閣議の日付、場所、それに主宰者の一覧である。

定例閣議の日付と場所

1994年			2000年		
日付	場所	議長	日付	場所	議長
1994年１月10日	リヤード	スルターン	2000年１月24日	ジェッダ	ファハド
1994年１月24日	リヤード	ファハド	2000年１月31日	リヤード	ファハド
1994年１月31日	リヤード	ファハド	2000年２月7日	リヤード	ファハド
1994年２月7日	リヤード	スルターン	2000年２月14日	リヤード	ファハド
1994年２月14日	リヤード	アブドゥッラー	2000年２月21日	リヤード	アブドゥッラー
1994年２月28日	リヤード	アブドゥッラー	2000年３月６日	リヤード	ファハド
1994年３月7日	マッカ	ファハド	2000年４月３日	ジェッダ	ファハド
1994年３月28日	リヤード	アブドゥッラー	2000年４月10日	ジェッダ	ファハド
1994年４月４日	リヤード	スルターン	2000年４月17日	ジェッダ	ファハド
1994年４月11日	マディーナ	ファハド	2000年４月24日	ジェッダ	ファハド
1994年４月18日	リヤード	アブドゥッラー	2000年５月１日	ジェッダ	ファハド
1994年４月25日	リヤード	アブドゥッラー	2000年５月8日	ジェッダ	アブドゥッラー
1994年５月２日	リヤード	ファハド	2000年５月15日	ジェッダ	ファハド
1994年５月９日	リヤード	アブドゥッラー	2000年５月22日	ジェッダ	ファハド
1994年５月30日	ジェッダ	ファハド	2000年５月29日	ジェッダ	アブドゥッラー
1994年６月６日	ジェッダ	スルターン	2000年６月12日	ジェッダ	ファハド
1994年６月13日	ジェッダ	スルターン	2000年６月19日	ジェッダ	ファハド
1994年６月20日	ジェッダ	スルターン	2000年６月26日	ジェッダ	ファハド
1994年６月27日	ジェッダ	スルターン	2000年７月３日	ジェッダ	アブドゥッラー
1994年７月11日	ジェッダ	スルターン	2000年７月10日	ジェッダ	ファハド
1994年７月18日	ジェッダ	スルターン	2000年７月17日	ジェッダ	ファハド
1994年８月１日	ジェッダ	アブドゥッラー	2000年７月24日	ジェッダ	ファハド
1994年９月12日	ジェッダ	アブドゥッラー	2000年７月31日	ジェッダ	ファハド
1994年９月19日	ジェッダ	アブドゥッラー	2000年８月７日	ジェッダ	ファハド
1994年９月26日	ジェッダ	アブドゥッラー	2000年８月14日	ジェッダ	ファハド
1994年10月３日	ジェッダ	アブドゥッラー	2000年８月21日	ジェッダ	ファハド
1994年10月17日	ジェッダ	ファハド	2000年８月28日	ジェッダ	ファハド
1994年10月24日	ジェッダ	ファハド	2000年９月４日	ジェッダ	スルターン
1994年10月31日	リヤード	ファハド	2000年９月11日	ジェッダ	ファハド
1994年11月７日	リヤード	ファハド	2000年９月18日	ジェッダ	ファハド
1994年11月14日	リヤード	ファハド	2000年９月25日	リヤード	ファハド
1994年11月21日	リヤード	アブドゥッラー	2000年10月２日	リヤード	ファハド
1994年11月28日	リヤード	ファハド	2000年10月９日	リヤード	ファハド
1994年12月26日	リヤード	ファハド	2000年10月16日	リヤード	ファハド
			2000年10月23日	リヤード	ファハド
			2000年10月30日	リヤード	ファハド
			2000年11月６日	リヤード	ファハド
			2000年11月13日	リヤード	ファハド
			2000年11月20日	リヤード	ファハド
			2000年11月27日	リヤード	ファハド
			2000年12月４日	リヤード	ファハド
			2000年12月11日	リヤード	ファハド
			2000年12月18日	マッカ	ファハド

リヤードとジェッダがマッカをはさんで交互に一定期間で交代しているのはわかるが、すくなくとも西暦で見るかぎり、きちんとした規則性を見出すのは困難だ。しかし、これをヒジュラ暦にかえてみると、若干の例外はあるものの、比較的きれいな規則性がうかびあがってくる。次の表はヒジュラ暦1418年と1420年の例である。

1418			1420		
ヒジュラ暦	場所	主宰者	ヒジュラ暦	場所	主宰者
Muharram 5, 1418	ジェッダ	ファハド	Muharram 4, 1420	ジェッダ	ファハド
Muharram 12, 1418	ジェッダ	ファハド	Muharram 11, 1420	ジェッダ	ファハド
Muharram 19, 1418	ジェッダ	ファハド	Muharram 18, 1420	ジェッダ	ファハド
Safar 3, 1418	ジェッダ	ファハド	Safar 2, 1420	ジェッダ	ファハド
Safar 10, 1418	ジェッダ	ファハド	Safar 9, 1420	ジェッダ	スルターン
Safar 24, 1418	ジェッダ	ファハド	Safar 16, 1420	リヤード	スルターン
Rabi I 2, 1418	ジェッダ	ファハド	Rabi I 1, 1420	リヤード	アブドゥッラー
Rabi I 16, 1418	ジェッダ	ファハド	Rabi I 8, 1420	リヤード	ファハド
Rabi I 23, 1418	ジェッダ	ファハド	Rabi I 15, 1420	ジェッダ	ファハド
Rabi I 30, 1418	ジェッダ	ファハド	Rabi I 29, 1420	ジェッダ	ファハド
Rabi II 7, 1418	ジェッダ	ファハド	Rabi II 6, 1420	ジェッダ	アブドゥッラー
Rabi II 14, 1418	ジェッダ	スルターン	Rabi II 13, 1420	ジェッダ	アブドゥッラー
Rabi II 28, 1418	ジェッダ	ファハド	Rabi II 27, 1420	ジェッダ	アブドゥッラー
Jumada I 6, 1418	ジェッダ	ファハド	Jumada I 5, 1420	ジェッダ	アブドゥッラー
Jumada I 13, 1418	ジェッダ	ファハド	Jumada I 12, 1420	ジェッダ	アブドゥッラー
Jumada I 20, 1418	ジェッダ	ファハド	Jumada I 19, 1420	ジェッダ	アブドゥッラー
Jumada I 27, 1418	?	ファハド	Jumada I 26, 1420	ジェッダ	アブドゥッラー
Jumada II 4, 1418	ジェッダ	ファハド	Jumada II 3, 1420	リヤード	アブドゥッラー
Jumada II 11, 1418	ジェッダ	ファハド	Jumada II 10, 1420	リヤード	アブドゥッラー
Jumada II 18, 1418	ジェッダ	ファハド	Jumada II 17, 1420	リヤード	アブドゥッラー
Jumada II 25, 1418	ジェッダ	ファハド	Jumada II 24, 1420	リヤード	ファハド
Rajab 17, 1418	リヤード	ファハド	Rajab 9, 1420	リヤード	ファハド
Rajab 24, 1418	リヤード	ファハド	Rajab 16, 1420	リヤード	ファハド
Shaban 1, 1418	リヤード	ファハド	Rajab 23, 1420	リヤード	ファハド
Shaban 8, 1418	リヤード	ファハド	Rajab 30, 1420	リヤード	ファハド
Shaban 15, 1418	リヤード	ファハド	Shaban 7, 1420	リヤード	ファハド
Shaban 22, 1418	リヤード	ファハド	Shaban 14, 1420	リヤード	ファハド
Shaban 29, 1418	リヤード	ファハド	Shaban 28, 1420	リヤード	ファハド
Ramadan 14, 1418	リヤード	ファハド	Ramadan 6, 1420	リヤード	ファハド
Ramadan 21, 1418	マッカ	ファハド	Ramadan 13, 1420	リヤード	ファハド
Shawwal 19, 1418	リヤード	ファハド	Ramadan 20, 1420	マッカ	ファハド
Shawwal 26, 1418	リヤード	ファハド	Shawwal 18, 1420	ジェッダ	ファハド
Dhulqada 4, 1418	リヤード	アブドゥッラー	Shawwal 25, 1420	リヤード	ファハド
Dhulqada 11, 1418	リヤード	アブドゥッラー	Dhulqada 3, 1420	リヤード	ファハド
Dhulqada 18, 1418	リヤード	ファハド	Dhulqada 29, 1420	リヤード	ファハド
Dhulqada 25, 1418	リヤード	ファハド	Dhulqada 17, 1420	リヤード	アブドゥッラー
Dhulhijja 23, 1418	ジェッダ	ファハド	Dhulqada 24, 1420	リヤード	ファハド
			Dhulhijja 21, 1420	リヤード	ファハド
			Dhulhijja 29, 1420	ジェッダ	ファハド

いくつか違いはあるが、この２つの年を比べると、共通点を発見できる。まず第一に

ヒジュラ暦の新年最初の閣議はかならずジェッダで行われるということである。それにラマダーン月最後の閣議はマッカで行われていることも重要であろう。このうち最初の点は、ズルヒッジャ月の中ごろから末にリヤードからジェッダに移動するといいなおすことができる。またラマダーン月の最後の10日間をマッカで過ごすのはファハド国王および一部のサウード家のメンバーにとっては毎年恒例の行事である。したがって、この期間の閣議は当然マッカで開催されねばならない。

定例閣議をヒジュラ暦の月別に各都市ごとに分類すると次のようになる。

ヒジュラ暦による月別分布

月 / 都市	リヤード	ジェッダ	マッカ	マディーナ	不明	計
Muharram	0	32	0	0	1	33
Safar	1	32	0	0	0	33
Rabi I	2	26	0	0	0	28
Rabi II	3	38	0	0	0	41
Jumada I	7	25	0	0	0	32
Jumada II	16	16	0	1	2	35
Rajab	34	0	0	0	0	34
Shaban	31	0	0	0	0	31
Ramadan	18	1	10	0	0	29
Shawwal	16	5	0	0	0	21
Dhulqada	36	1	0	1	1	39
Dhulhijja	3	13	0	0	0	16
計	167	189	10	2	4	372

この表からいくつかの例外を切り捨てると、定例閣議移動の規則が明らかになってくるだろう。すなわち、ズルヒッジャ月（ヒジュラ暦第12月）の終わりにジェッダに移動し、新年のムハッラム月からジュマーダー・ウーラーあるいはジュマーダー・アーヒラまでそのままジェッダに居座り、それからリヤードに移動する。リヤードには両ジュマーダー月からラマダーン月前半までいて、ラマダーン月後半はマッカに移動する。マッカ移動前後には場合によってはジェッダに立寄ることもあるが、基本的にはズルヒッジャ月半ばまでリヤードにいて、ズルヒッジャ月後半にジェッダに移動する、ということである。

またサウディアラビアにおける公的な休日であるイードルフィトルとイードルアドハーのあたりは通常、定例閣議も休会となる。シャウワール月およびズルヒッジャ月の閣議が少ないのはそのためである。ただし、閣議の主宰者とヒジュラ暦の関係についてはわからない。手持ちの資料からは法則らしきものは浮かんでこなかった。

たしかに定例閣議そのものは比較的厳格にヒジュラ暦にのっとって移動しているが、サウディアラビアの政治全体、国王にかかわるものすべてがそうなわけではない。サウディアラビア内外交および経済上、必要であれば、西暦を用いることがある。その典型が国家予算である。予算もはじめはヒジュラ暦にもとづいていたが、現在は西暦でつくられている（サウディアラビアの会計年度は西暦の１月１日から12月31日）。したがって予算は、ふつう西暦の12月末にヒジュラ暦とは無関係に発表される（場合によっては１月にまで食い込むこともある）。もちろん予算は閣僚評議会の承認を必要とする。

また外交面ではGCCサミットが毎年12月に開催される。サウディアラビア国王も当然、それに参加しなければならないので、これもまたヒジュラ暦の例外事項といえる。さらにサウディアラビアの国祭日は西暦の９月23日となっていることもつけくわえておこう。

こうしたさまざまな要素をかみあわせると、サウディアラビアの国王がいつどこで何をするのかはだいたい予測できることになる。逆にいえば、この予測に反することが起きれば、それは非常事態の可能性があるということである。

いくら昔にくらべて移動が楽になったとはいえ、年に何度も閣議のために多数の老人や病人たちをともなって広い国内を移動するというのは重労働である。人だけでなく、書類その他、動かさねばならないものはすくなくない。ここまでくると、サウディアラビアの首都はリヤードではなく、国王がいる場所こそが首都であると考えたほうがいいのかもしれない。こうした非西洋的特徴の起源を、部族的な移動性（モビリティー）に求めることができると断定するにはさらなる検証が必要であろう。だが、一見すると非常に近代的な政治機構に見える閣僚評議会の実態がきわめてサウジ的であるということは確かである。

６．おわりに

ここまで雨乞いといい、剣舞といい、非サウディ的な文脈からはどちらかというと奇妙に見える側面をとりあげてきた。しかし、ここであげた要素は、部外者にとってはどうでもいいことでも、サウディアラビアの国内問題としてはきわめて重要なものと考えられる。だからこそ、一見非合理的にみえながらも、これまで存続してきたわけだし、場合によっては新たにサウディの体制に組み込まれてきたのである。

これらはすべてルーティンであり、それ自体は積極的な意味はない。しかし、そのルーティンが破られるとすれば、それは事件となる。国王が国王としての役割を果たせなくなった可能性があるからである。

たとえば1982年６月１日、サウディアラビア国営通信（SPA）は次のように報じた。

閣僚会議は今夕19時、ハーリド・ビン・アブドゥルアジーズ国王陛下の主宰で重要な会議を開いた。会議には皇太子で副首相のファハド・ビン・アブドゥルアジーズ殿下、第２副首相で国家警備隊長官のアブドゥッラー・ビン・アブドゥルアジーズ殿下が出席した。会議後、ヤマーニー情報相は、会合が今夕21時に終了し、域内情勢を協議するとともに、サウード外相によるアラブ諸国歴訪、GCC閣僚会議の結果に関する報告を受けたと述べた。情報相によれば、ハーリド国王は、われわれアラブ･イスラームの民の歴史上重大な局面においてコンセンサス、社会の団結、連帯が重要であることを説明したという。国王はまた、「われわれは、この地域がいかなる分裂、離散もないよう、またわれわれの民、国民のために一致団結することができるよう神にお願いする。われわれは神の加護と成功を求める」と述べた。国王は、すべてのものに対し、その義務を実行し、その責任を果たすよう要請し、次のように語った。「われわれは、われわれの宣言した、すでに知られている以前からの政策を継続するであろう。」

これは定例閣議ではなく、臨時閣議である。この約２週間後、ハーリド国王はサウディアラビア南部の保養地、ターイフにおいて心臓発作で亡くなった。この記事に感じられる、ある種の大仰さ、唐突さは、６月１日の時点でハーリド国王の死が不可避となり、王の遺志が、国権の最高執行機関である閣僚会議で確認されたことを物語っている。

ファハド国王の現在容態についてもいろいろ取りざたされているが、前述のとおり、すくなくとも現時点では閣僚会議の議長職はきちんとこなしているように見える。しかし、国王がいるべきときにいるべき場所にいなかったり、このSPA報道のような記事が発表されたりしたら、要注意ということになる。ちなみにサウディアラビア建国以来、通常のかたちで自然死したのはアブドゥルアジーズ初代国王とハーリドだけである。そしてこの2人はいずれもターイフで死んでいる。廃位されたサウードはアテネで客死し、ファイサルはリヤードで暗殺された。ターイフが２人の王の死地に選ばれたのは気候的な問題が大きいと思われるが、それだけではない可能性もある。ハーリドがターイフに移動したのはまさに死の直前、死がまぬがれなくなったときだったからである。